

短期大学保育系学生の志望動機と資質について： 入学直後の調査

大 村 壮

キーワード／志望動機、保育者効力感、保育者

問題・目的

保育者になるためには、現在では養成校と呼ばれる大学や短期大学に進学するのが一般的である。最近では保育者の資質や専門性などについて言及されることが多くなってきた（鯨岡, 2000; 森上, 2000; 柴崎・足立, 2009）。保育者としての資質にはどのようなものがあるのだろうか。江田（2007）は、保育士の資質能力について保育園長や主任などの管理職者に対して調査を行ない、「子どもへの思いやりや願いを的確に捉える洞察力」や「子どもの成長・発達に関する理解」、「子どもへの愛情」、「保育士としての使命感」、「思いやりの心」、「感動する豊かな感性」などを挙げていた。また保育の専門性についてはさまざまなことが主張されている。垣内（2008）は保育の専門性には、専門的知識・技術、実践の裁量権、使命や天職という意味での使命感、経験・資格があると述べている。また文部科学省による幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書（2002）では、幼稚園教員に求められる専門性として、適切な指導を行なう力や、家庭や地域社会との連続性を保ちつつ教育を展開する力などいくつか挙げられている。そのなかには「幼児の発達段階や発達過程を、その内面から理解し、生活の中で幼児が示す発見の喜びや達成感を共感をもって受け入れる、といった幼児理解が、基本として重要である」とされている。このように保育者の専門性には技術や知識という側面から、感受性などの側面まで実にさまざまな面が含まれるとされている。

こういった専門性をもった人材育成が求められているなか、大学・短期大学では学生の質の低下といったことが広くいわれるようになってきている。この学生の質の低下というのは、学習能力の面を指していることが多く、本学においても同様のことがいわれるようになってきている。その一方で、学生たちの性格の面などは特段、耳にすることがない。例えば「最近の学生は粗雑な学生が多い」や「最近の学生は他人の気持ちを考えない」といったことは聞かれない。保育者の専門性には、知識や技術などある程度の学習能力を基礎として身につけていく側面がある一方、「資質」という言葉で表現されるような、どちらかという入学前から個々の学生のなかにある側面もある。そこで本研究では、その資質といわれるような側面、特に性格の面や「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」と定義づけられる保育者効力感（三木・桜井, 1998）に焦点を当てて検討する。その際、大学に進学した動機と保育者を志望する動機から検討する。これまでには、保育者を目指している学生ほど、学校適応感が高いこと（田中, 2002）が明らかにされている。また保育系学部や学科に入学してくる学生は全般的に意識が高いといわれている（安藤, 2007）。しかし入学した学生全員が保育者になれるとは限らず、

数名は学業成績が振るわない、欠席が多くなるなどの理由から保育者を諦め、別の道を目指すことになる。入学後に実際に保育の勉強を初めてモチベーションが低下してしまったのかもしれないし、そもそも入学時からあまりモチベーションが高くなかったのかもしれない。そこで本研究では、短期大学に入学したばかりの保育者を志望する学生を対象に、保育者として必要と思われるパーソナリティ特性や保育者効力感といった保育者の資質といえる側面と入学時の大学入学動機や保育者志望動機との関連を検討することを目的としている。

方 法

(1) 調査協力者

T 短期大学保育科の1年生と、英文科の学生のうち幼稚園教諭2種免許状取得を希望している1年生の計238名（男性7名、女性232名）。

(2) 手続き

入学後、最初の授業のなかでアンケートを実施した。実施時期は2011年4月である。

(3) 調査項目

性別、保育者を目指し始めた時期、保育者効力感10項目（三木・桜井, 1998）、大学進学志望動機（八木・齊藤・牟田, 2000）のうち複数の因子に高い因子負荷量を示した項目を省いた16項目、保育者志望動機（長谷部, 2006）を参考にして作成した10項目、保育者適性尺度（藤村, 2010）のうちそれぞれの因子に対する負荷量が高かった21項目である。ただし、保育者適性尺度は、尺度として信頼性や因子的妥当性は十分に検証されているが、基準関連妥当性は検討されていないため、この尺度の得点が高いことが保育者としての適性が高いことを保障しているとは言い難いのではないだろうか。またその対象者も保育者ではなく、あくまで学生である。そのため以下では、保育者適性ではなく、藤村（2010）もパーソナリティ特性としての保育者適性尺度と述べているため、本研究では、保育者として必要と思われるパーソナリティ特性と呼ぶこととする。

結 果

(1) 保育者を目指し始めた時期

保育者を目指した時期を幼児、小学生、中学生（1年次、2年次、3年次）、高校生（1年次、2年次、3年次）で答えてもらった。その結果、半数近くの学生が小学生までには保育者を目指し始めていたことが明らかになった（Table1）。

Table1 保育者を目指し始めた時期

時期	人数
幼 児	23 (11.68)
小 学 生	67 (34.01)
中学1年次	16 (8.12)
中学2年次	33 (16.75)
中学3年次	21 (10.66)
高校1年次	15 (7.61)
高校2年次	10 (5.08)
高校3年次（もしくは昨年）	12 (6.09)
計	197 (100)

() 内は%

(2) 大学進学志望動機の因子構造

「大学進学動機」について主因子法のバリマックス回転による因子分析を行なった。その結果、複数の因子から高い負荷を受けている項目や2項目のみで因子を構成している項目などを削除し、再度因子分析を行ない、固有値1.0以上で因子負荷量が.35以上のものを採用したところ最適解を得た2因子を抽出し、次のような因子構造が抽出された (Table2)。累積寄与率は40.58%である。第一因子は、短期大学で学ぶことを追求していることを表す項目から構成されているため、「興味・専門性追求」因子と命名した。第二因子は、短期大学で就職に結びつくような資格を取得したり、短期大学に進学することで高校を卒業して就職するよりも付加価値を高めようとしていることを表す項目から構成されているため、「就職・経済価値追求」因子と命名した。またクロンバックの α 係数を算出したところ、「興味・専門性追求」因子が.741であり、「就職・経済価値追求」因子が.702であった。双方の因子ともに十分な信頼性があるといえる。

Table2 大学進学志望動機の因子構造

	I	II	共通性
因子 I：興味・専門性追求 $\alpha = .741$			
興味のある分野を深く掘り下げるため	.689	.021	.475
得意とすることを追求するため	.635	.269	.476
自分の才能を伸ばすため	.616	.255	.444
同じような目的をもった友人を得るため	.572	.253	.391
専門的な知識や技術を得るため	.473	-.005	.223
因子 II：就職・経済価値追求 $\alpha = .702$			
就職後、多くの収入・給与を得るため	.040	.841	.709
高い社会的地位を得るため	.141	.659	.454
就職に有利だから	.098	.547	.309
卒業してすぐに働くため	.218	.350	.170
寄与率	20.96%	19.62%	

(3) 保育者志望動機の因子構造

「保育者志望動機」について主因子法のバリマックス回転による因子分析を行なった。その結果、複数の因子から高い負荷を受けている項目や2項目のみで因子を構成している項目などを削除し、再度因子分析を行ない、固有値1.0以上で因子負荷量が.30以上のものを採用したところ最適解を得た2因子を抽出し、次のような因子構造が抽出された (Table3)。累積寄与率は30.70%である。第一因子は、子どもとの関わりを求めて保育者を志望するようになったことを表す項目から構成されているため、「子どもとの関わり」因子と命名した。第二因子は、保育者への憧れを表す項目に対する負荷が高いことから、「保育者への憧れ」因子と命名した。またクロンバックの α 係数を算出したところ、「子どもとの関わり」因子が.459であり、「保育者への憧れ」因子が.514であった。双方の因子ともに十分な信頼性は得られなかった。そのため今後の分析結果は暫定的なものである可能性がある。

Table3 保育者志望動機の因子構造

		I	II	共通性
因子 I：子どもとの関わり	$\alpha = .459$			
子どもが好きだから		.692	.019	.479
子どもと関わる仕事がしたいから		.687	.026	.472
ボランティアや保育の職場体験に参加して		.442	.164	.113
因子 II：保育者への憧れ	$\alpha = .514$			
小さい頃（幼児）からあこがれていて		.050	.617	.384
自分の幼・保育園の先生にあこがれて		.043	.507	.259
自分に向けた仕事だと思ったから		.181	.433	.220
親や教師など周囲の人に勧められて		.007	.336	.113
寄与率		16.90%	13.80%	

(4) 保育者として必要と思われるパーソナリティ特性の因子構造

「保育者として必要と思われるパーソナリティ特性」について主因子法のバリマックス回転による因子分析を行なった。その結果、複数の因子から高い負荷を受けている項目や2項目のみで因子を構成している項目などを削除し、再度因子分析を行ない、固有値1.0以上で因子負荷量が.35以上のものを採用したところ最適解を得た3因子を抽出し、次のような因子構造が抽出された（Table4）。累積寄与率は47.42%である。

第一因子は、他者の感情を自分のことのように感じることを表す項目から構成されているため、「他者の感情への感受性」因子と命名した。第二因子は、他者に積極的に関わることを表す項目から構成されているため、「他者への関わりへの積極性」因子と命名した。そして第三因子は、子どものために自分の労力を尽くすことを表す項目から構成されているため、「子どもへの自己犠牲心」と命名した。またクロンバックの α 係数を算出したところ、「他者の感情への感受性」因子が.827であり、「他者への関わりへの積極性」因子が.765であり、「子どもへの自己犠牲心」尺度が.786であった。3つの因子ともに十分な信頼性が得られた。

(5) 大学進学志望動機と保育者志望動機による類型

大学進学志望動機（2因子）と保育者志望動機（2因子）の類型を探索的に検討するためにWard法によるクラスタ分析を用いて調査協力者の分類を試みた。その際、得られたデンドログラムを参考にしてクラスタごとの特徴を解釈しやすい4クラスタを採用した。各クラスタの特徴ならびに一元配置分散分析の結果はTable5の通りである。一元配置分散分析の結果、群間差が認められた（子どもとの関わり： $F(3,224)=10.97$, $p<.001$ 、保育者への憧れ： $F(3,224)=94.68$, $p<.001$ 、興味・専門性追求： $F(3,224)=112.35$, $p<.001$ 、就職・経済価値追求： $F(3,224)=73.92$, $p<.001$ ）。TukeyのHSD法（5%水準）による多重比較を行なったところ、「子どもとの関わり」については、I群がII群とIII群とIV群よりも有意に低かった。「保育者への憧れ」については、III群がI群より、I群がII群より、II群がIV群より有意に低かった。そして「興味・専門性追求」については、I群がII群とIII群とIV群より、III群がIV群よりも有意に低かった。「就職・経済価値追求」については、II群がI群より、I群がIII群より、III群がIV群よりも有意に低かった。

Table4 保育者として必要と思われるパーソナリティ特性の因子構造

	I	II	共通性	
因子Ⅰ：他者の感情への感受性 $\alpha = .827$				
他人の気持ちを自分のことのように感じる人が多い	.712	.046	.200	.549
他人の気持ちの微妙なところがわかるほうである	.682	.191	.022	.502
他人の気持ちがよくわかる	.635	.149	.191	.462
他人のことで喜んだり悲しんだりすることがよくある	.603	.125	.300	.469
他人の気持ちになって喜んだり悲しんだりすることがたびたびある	.585	.171	.153	.394
他人の何気ない言葉からも、その人の気持ちを察することができる	.549	.140	.278	.398
因子Ⅱ：他者への関わりの積極性 $\alpha = .765$				
他人と気軽に接することができる	.016	.953	.073	.914
誰にでも気軽に対応できる	.211	.743	.103	.608
何事にも積極的に動くほうである	.220	.452	.248	.314
いざというとき、すぐに行動できる	.224	.451	.261	.322
因子Ⅲ：子どもへの自己犠牲心 $\alpha = .786$				
子どものためなら、辛いことでも逃げないで努力する	.100	.151	.823	.710
子どものことに労力を惜しまない	.229	.097	.724	.586
子どもの成長の助けになるような世話をする	.312	.212	.522	.416
いつも相手のことを思って行動する	.292	.188	.378	.264
寄与率	19.79%	15.04%	14.50%	

Table5 大学進学志望動機と保育者志望動機のクラスター別平均値と一元配置分散分析結果

	I 群 (N=55)	II 群 (N=57)	III 群 (N=56)	IV 群 (N=60)	F 値	多重比較
子どもとの関わり	4.33 (0.58)	4.71 (0.35)	4.60 (0.42)	4.76 (0.38)	10.97***	I < III, II, IV
保育者への憧れ	3.27 (0.58)	3.93 (0.49)	2.89 (0.42)	4.25 (0.42)	94.68***	III < I < II < IV
興味・専門性追求	3.21 (0.43)	4.30 (0.42)	4.08 (0.33)	4.51 (0.43)	112.35***	I < III < IV I < II
就職・経済価値追求	2.89 (0.51)	2.49 (0.66)	3.34 (0.62)	3.99 (0.49)	73.92***	II < I < III < IV

※上段：平均値、下段（）内：SD、*** p<.001

ここからⅠ群～Ⅳ群の特徴を解釈する。Ⅰ群はすべての因子において全体平均より低く、多重比較の結果からも他群より低い傾向にある。そのためⅠ群は「低モチベーション群」とする。Ⅱ群は保育者志望動機の2因子と「興味・専門性追求」因子の平均値が高めで、「就職・経済価値追求」因子の得点が4群でもっとも低かった。そのため他の群に比べて、子どもとの関わりを求め、そして保育者に憧れて保育の勉強をするために進学していると考えられるため、「保育の道を突き進む群」とする。Ⅲ群は「子どもとの関わり」因子の得点がちよ

うど全体平均と同じで、「保育者への憧れ」因子の得点は4群でもっとも低く、さらに「興味・専門性追求」因子の得点も全体の平均に近かった。その一方、「就職・経済価値追求」因子は全体平均よりも高かったため、高校卒業で就職するよりも短期大学卒業で、さらに資格や免許を取得した方が就職に有利だったり、経済的に恵まれるという動機がより強く見受けられるため、「経済価値を求めて進学した群」とする。そしてIV群は、すべての因子の得点が全体平均よりも高く、多重比較した結果、すべての因子の得点が有意にもっとも得点が高かった。そのため、「保育をがんばり就職も考えて進学した群」とする。

(6) 保育者を目指し始めた時期と志望動機の関係

保育者を目指し始めた時期によって、学生がどのクラスタ類型に分かれるのかについて χ^2 検定を行なった (Table6)。その際、小学生までに保育者を目指し始めたのか、中学生になってから保育者を目指し始めたのかで区別した。その理由は、国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2011) によると、97.1%の中学校において、総合学習の時間に職場体験を行なっている。本研究の調査協力者が中学生の頃にも相当数の中学校で職場体験が実施されていたと考えられる。実際に学生も中学生のときの職場体験をきっかけにして保育者を目指したと述べる者がいる。そのため、小学生のうちに保育者を目指し始めたのか、中学生以降に保育者を目指し始めたのかには違いがあると考えられるため、小学生までに保育者を目指したのか、中学生以降に保育者を目指したのかを区別して分析した。その結果、有意差が認められた ($\chi^2 (3)=11.017, p<.05$)。次に残差分析を行なったところ、経済価値を求めて進学した群において度数の偏りに有意差が認められ、保育の道を突き進む群、保育をがんばり就職も考えて進学した群において、度数の偏りに有意傾向が認められた (Table6)。経済価値を求めて進学した群に、中学生以降に保育者を目指し始めた者の方が小学生までに保育者を目指し始めた者よりも多かった。保育の道を突き進む群と保育をがんばり就職も考えて進学した群には、小学生までに保育者を目指し始めた者の方が多い傾向があった。

Table6 保育者を目指した時期と志望動機の関係

	I 群	II 群	III 群	IV 群	合計
小学生までに	17(9.0)	28(14.9) ⁺	13(6.9) [*]	28(14.9) ⁺	86(45.7)
中学生以降に	26(13.8)	22(11.7) ⁺	33(17.6) [*]	21(11.2) ⁺	102(54.3)
合計	43(22.8)	50(26.6)	46(24.5)	49(26.1)	188(100)

※ () 内は% * $p<.05$ + $p<.10$

※ I 群:「低モチベーション群」、II 群:「保育の道を突き進む群」、III 群:「経済価値を求めて進学した群」、IV 群:「保育をがんばり就職も考えて進学した群」

(7) 志望動機の類型によるパーソナリティ特性や保育者効力感の違い

先に検討した志望動機の類型によって保育者に必要と思われるパーソナリティ特性や保育者効力感に違いが生じるのかについて一元配置分散分析を行なった。その結果、群間差が認められた (他者の感情への感受性: $F(3,223)=5.24, p<.01$ 、他者への関わりへの積極性: $F(3,222)=12.28, p<.001$ 、子どもへの自己犠牲心: $F(3,224)=14.87, p<.001$ 、保育者効力感: $F(3,221)=8.10, p<.001$)。Tukey の HSD 法 (5%水準) による多重比較を行なった

ところ、「他者の感情への感受性」については、Ⅰ群とⅢ群がⅣ群よりも有意に低かった。Ⅱ群は他の群とは有意差が認められなかった。「他者への関わりの積極性」については、Ⅰ群がⅡ群とⅣ群より、Ⅲ群がⅣ群より有意に低かった。「子どもへの自己犠牲心」については、Ⅰ群とⅢ群が、Ⅱ群とⅣ群よりも有意に低かった。そして「保育者効力感」については、Ⅰ群がⅡ群とⅣ群より、Ⅲ群がⅣ群よりも有意に低かった（Table7）。

Table7 志望動機の類型による保育者に必要と思われるパーソナリティ特性と保育者効力感の違い

	Ⅰ群	Ⅱ群	Ⅲ群	Ⅳ群	F値	多重比較
他者への感受性	3.71 (0.58)	3.99 (0.52)	3.79 (0.70)	4.09 (0.54)	5.24**	I, Ⅲ < Ⅳ
関わりの積極性	3.68 (0.58)	4.11 (0.50)	3.93 (0.62)	4.28 (0.48)	12.28***	I < Ⅱ, Ⅳ Ⅲ < Ⅳ
自己犠牲心	3.22 (0.69)	3.87 (0.66)	3.48 (0.74)	3.97 (0.63)	14.87***	I, Ⅲ < Ⅱ, Ⅳ
保育者効力感	3.09 (0.37)	3.36 (0.49)	3.25 (0.60)	3.53 (0.48)	8.10***	I < Ⅱ, Ⅳ Ⅲ < Ⅳ

※ 上段：平均値、下段（ ）内：SD、*** $p < .001$ ** $p < .01$

※ Ⅰ群：「低モチベーション群」、Ⅱ群：「保育の道を突き進む群」、Ⅲ群：「経済価値を求めて進学した群」、Ⅳ群：「保育をがんばり就職も考えて進学した群」

考 察

本研究では短期大学保育系学生を対象に、保育者志望動機や大学進学志望動機、ならびに保育者に必要と思われるパーソナリティ特性、保育者効力感について検討した。その結果、(1) 早めに保育者を将来の職業として考え始める学生ほど、子どもとの関わりや保育者への憧れから保育者を志望したり、興味や保育の専門を学ぶために大学に進学するという傾向が強かった。また、(2) 保育者志望動機と大学進学志望動機から対象者を4群に分け、保育者に必要と思われるパーソナリティ特性の3因子と保育者効力感について検討したところ、「他者の感情への感受性」では、「低モチベーション群」、「経済価値を求めて進学した群」よりも「保育をがんばり就職も考えて進学した群」の方が有意に得点が高かった。そして「他者への関わりの積極性」では、「低モチベーション群」よりも「保育の道を突き進む群」、「保育をがんばり就職も考えて進学した群」の方が、そして「経済価値を求めて進学した群」よりも「保育をがんばり就職も考えて進学した群」の方が有意に得点が高かった。「子どもへの自己犠牲心」では、「低モチベーション群」よりも「保育の道を突き進む群」と「保育をがんばり就職も考えて進学した群」の方が、そして「経済価値を求めて進学した群」よりも「保育をがんばり就職も考えて進学した群」の方が有意に得点が高かった。以下、これらの結果について考察する。

(1) 保育者を目指し始める時期と志望動機の類型の関係について

中学生以降に保育者を目指し始めた者ほど、「経済価値を求めて進学した群」に多く見受けられた。また有意傾向ではあるが、小学生までに保育者を目指し始めた者ほど、「保育の

道を突き進む群」、「保育をがんばり就職も考えて進学した群」に多く見受けられる傾向があった。なお、この結果は加藤（2009）と同様の結果であったため、妥当であるといえるだろう。先に国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2011）で指摘されていた通り、ほとんどすべての中学校で職場体験が実施されている。そのため中学生以降に保育者を目指し始めた学生は、大人から将来の職業について考える機会を与えられてから自らの将来を考え始めたと考えられる。つまり外側から将来について考える機会を与えられ、保育者を目指し始めたといえる。そのような学生は、保育者に憧れたりするよりも、資格や免許を取得し、経済的により豊かになることを優先的に考えていたのだと考えられる。それに対して小学生のうちに保育者を目指し始めた学生は、大人から機会を与えられる前にある程度、自立的に保育者を将来の職業として考えていたといえる。そのためどちらかという資格・免許取得自体が目的というよりも、保育者になることが目的になっており、経済的により豊かになることは副次的なものとして捉えているのではないだろうか。

（2）志望動機の類型と保育者に必要と思われるパーソナリティ特性と保育者効力感について

志望動機の類型とパーソナリティ特性あるいは保育者効力感の関係において、ある程度一貫した傾向が見られた。それは「低モチベーション群」がすべてにおいてもっとも得点が低く、「経済価値を求めて進学した群」がその次に低く、「保育の道を突き進む群」がその次に続き、もっとも得点が高かったのが「保育をがんばり就職も考えて進学した群」であったことである。まずはもっとも得点が低かった「低モチベーション群」ともっとも得点が高かった「保育をがんばり就職も考えて進学した群」について考察し、その後になぜこのような順序になったのかについて検討する。

保育者志望動機と大学進学志望動機の双方ともに低調な「低モチベーション群」が、保育者に必要と思われるパーソナリティ特性3因子と保育者効力感において、もっとも得点が低かった。石塚（1997）が不本意入学の学生は大学に対して消極的、あるいは否定的な態度を示し、将来展望もやや不明確な傾向があると述べていることから、この「低モチベーション群」の学生たちは、保育の勉強をやりたいという気持ちや保育職という職業に就きたいという気持ちが低く、保育者効力感なども得点が低くなっていたのだと考えられる。その一方、保育者志望動機と大学進学志望動機の双方ともに高かった「保育をがんばり就職も考えて進学した群」は、保育者に必要と思われるパーソナリティ特性3因子と保育者効力感においても得点をもっとも高かった。この群の学生たちは保育者に憧れ、保育自体に興味がありそれを学ぶために進学したといえる。そして保育者になるために資格・免許をとろうとしていると考えられる。そのため、「低モチベーション群」とは違い、あくまで目的・目標は保育者になることであり、保育士や幼稚園教諭免許の取得は、保育者になるための手段として捉えていると考えられる。そしてそのような学生たちであるため、他者の感情に対する感受性や他者への関わりの積極性が高くなっていると思われる。また保育者になることの意識が強いと思われるので、子どもに対する自己犠牲心も高くなっているのではないだろうか。そして同様のことから保育者効力感も他群に比べて高くなっていると考えられる。

そして先に述べたような順序になったことについて検討する。もっとも得点の高かった「保育をがんばり就職も考えて進学した群」は、保育者への憧れや子どもとの関わりをきっかけに保育者を志望するようになっていく上に、大学進学についても興味や専門性を学びた

いという動機も高くなっていた。そのため、保育者に憧れ、保育の勉強をしたくて進学したといえるのだが、もう一つ特徴なのは、進学することで給与などが上がることも進学動機になっている点である。ここが次に得点の高かった「保育の道を突き進む群」との違いである。「保育の道を突き進む群」は、給与が上がるといった経済価値が進学動機になっていなかった。この経済価値を求めることが進学動機に入っていないと、とにかく保育を勉強し、保育者になりたいというだけになってしまう。つまり保育のことしか頭にないような状態だといえる。つまり視野が狭く頭が固くなっているといえる。それに対して経済価値を求めることが進学動機に入っているということは、保育を勉強したくて進学したが、その一方で進学することで経済価値が上がることも理解して進学しているため、保育でなければダメというような頭の固さがないのではないだろうか。そういった柔軟さがパーソナリティ特性各因子の得点の高さや保育者効力感の得点の高さに繋がっていたのかもしれない。それに対して「保育の道を突き進む群」は、すでに述べたように、柔軟性が少し足りないため、保育者効力感についても自信がなく、「保育をがんばり就職も考えて進学した群」に比べて得点も低くなってしまったのかもしれない。そして「経済価値を求めて進学した群」であるが、この群は保育者志望動機も大学進学志望動機も「保育の道を突き進む群」に比べて低く、唯一、「就職・経済価値追求」因子のみ得点が高かった。そのため、保育者になりたいという気持ちもそれほど高くなく、どちらかということ、短期大学に進学することで給与が上がることや、資格・免許を取得することでより就職しやすくなるということで進学した傾向が強いと思われる。そのため、パーソナリティ特性もそれほど得点が高くなく、保育者効力感も同様に得点が低くなっていたのだと考えられる。そして再議にもっとも得点の低かった「低モチベーション群」だが、保育者の志望動機も大学進学志望動機もいずれも低かったため、パーソナリティ特性と保育者効力感の得点が低くなっていたのだと考えられる。

(3) まとめ

本研究では、短期大学に入学したばかりの保育系学生を対象として調査を行なった。保育系学部・学科は、他の学問分野に比べて、はっきりとした目的意識を持ち、入学の動機も明確で、卒業後は保育職に就く者が多いといわれている（安藤，2007）。本研究でも、大学入学志望動機の全体平均は中立点である3点以上であり、目的意識をもっているといっていよう。しかし今回の調査の協力学生のなかには現時点で退学してしまっている者もいる。全体的には目的意識などはもっているといえるが、学生の中には保育者以外の進路を考える学生も出てくると思われる（横倉，1993）。また「低モチベーション群」の学生もいる。そういった学生が、今後、短期大学のなかで学んでいくなかで保育者になるということに対するモチベーションが上がっていくのか、そしてどのような過程で変化していくのかを検討することが必要だろう。そして入学直後にはモチベーションが低くとも、その後向上するのかが否かを明らかにしていく必要があるだろう。また「保育をがんばり就職も考えて進学した群」なども、入学直後はモチベーションも高かったが、短期大学で学んでいくなかでどのように変化していくのかしないのかも合わせて検討する必要があると思われる。それによって、こういったタイプの学生がこういった学びを経験し、保育者となっていくのかを検討できるのではないだろうか。なお、神谷（2010）によると、進学理由によって保育者効力感の年次的変化に違いがあることが明らかにされている。これらの知見も参考にして検討していかな

ければならないだろう。

文 献

- 安藤史高 2007 保育系短期大学生の就職動機づけに対して自律性欲求・進路変更が及ぼす影響. 一宮女子短期大学紀要, 46, 71-78.
- 江田美代子 2007 保育士に求められる資質能力に関する調査研究 宮崎女子短期大学紀要, 34, 31-46.
- 藤村和久 2010 保育士、幼稚園教諭を目指す学生のための保育者適性尺度の構成. 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 9, 129-143.
- 長谷部比呂美 2006 保育者をめざす学生の志望動機と資質能力の自己評価. 淑徳短期大学研究紀要, 45, 115-130.
- 石塚奈苗 1997 大学生における人格適応感・不本意入学感・未来展望の三者関連. 日本性格心理学会発表論文集, 6, 41.
- 垣内国光 2008 プロの保育者してますか? 保育者の悩み・専門性・労働. かもがわ出版.
- 神谷哲司 2010 保育系短期大学生の進路理由による保育者効力感の縦断的变化. 保育学研究, 48(2), 86-95.
- 加藤麻里恵 2009 保育者養成大学在学学生における進学動機、就職希望および保育者効力感. 保育士養成研究, 27, 29-36.
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2011 平成22年度職場体験・インターンシップ実施状況等調査結果.
- 鯨岡 峻 2000 保育者の専門性とはなにか 発達, 83, 53-60.
- 三木知子・桜井茂男 1998 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響. 教育心理学研究, 46, 203-211.
- 文部科学省 2002 幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告.
- 森上史朗 2000 保育者の専門性・保育者の成長を問う 発達, 83, 68-74.
- 柴崎正行・足立里美 2009 保育者アイデンティティに関する研究の動向と展望: 日本における保育者アイデンティティ研究. 大妻女子大学家政系研究紀要, 45, 25-33.
- 田中秀明 2002 保育者養成校における学生の学習理由と保育者志向性および学校適応感ならびに保育職に関する効力感との関係. 共栄学園短期大学研究紀要, 18, 167-177.
- 横倉 聡 1993 保育系学科学生の就職に関する意識について: 一般企業を目指す保育系学科学生の考え方とは. 横浜女子短期大学研究紀要, 8, 79-96.
- 八木晶子・齊藤貴浩・牟田博光 2000 高校生の大学進学志望動機と進学情報の有用度との関連に関する分析 進路指導研究, 20, 1-8.